

巫女と客人

マ
レ
ビ
ト

著・絵 式上 炉伯



ミニマム文庫

巫女と客人

著・式上炉伯

目次

序章……………p.7

第一話 川姫……………p.8

第二話 夕刻……………p.28

第三話 お泊り……………p.43

第四話 お散歩……………p.59

第五話 お留守番……………p.71

第六話 お祭り……………p.90

第七話 客人神……………p.103

第八話 神憑け……………p.116

第九話 憑依……………p.135

第十話 愛撫…………p.156

第十一話 薄れる少女…………p.178

第十二話 初体験…………p.199

第十三話 色付く木の葉…………p.218

番外編 店番…………p.225

第十四話 二年目…………p.237

第十五話 夏休み…………p.257

第十六話 橙色の教室…………p.273

第十七話 えっちな少女…………p.300

第十八話 飲み会…………p.328

第十九話 色狂い…………p.344

第二十話 若い女教師…………p.357

第二十一話 伝承……………p.369

番外編・二 最高の幸せ……………p.376

第二十二話 欲しがる子……………p.399

第二十三話 巫病……………p.412

第二十四話 変化……………p.427

最終話 狂った日々……………p.437

エピローグ……………p.455

序章

心地良い初夏の風がカーテンを揺らす、橙色に色付いた部屋の中。年季が入って薄茶色く変色した畳の上にあぐらをかき、机上に並べられている無数のノートの中から『No.1』とだけ書かれているものを手に取ると、窓から差し込む夕陽の下、所々にシミが浮かんでいるその表紙を捲る。

相変わらず下手な字ではあるが、この字と付き合ってもう何十年と経つ。当初は研究用として記録を始めたものなので、最初から人に読ませることは考慮に入れていないし、この記録は誰の目にも触れさせるつもりはない。コレを読めるのは私だけであり、コレは、私だけのモノだ。

私は湯気を立ち昇らせている傍らのカップに指をかけると、淹れたての熱いコーヒーを静かにすすり、罫線を見殺して殴り書かれている文字を追いつつ始めた。

これは、とある山間集落での物語である。

第一話 川姫

その燃費の悪そうな荒いエンジン音を聞いただけで、大量の排ガスを吹き出させて走っているのが分かる旧型の小型バスに乗り、俺は目的の場所へと向かうために、車一台分の幅しかない細い山道を登っていた。

うねうねと大きく蛇行をするように走るものだから、この山道に入ってからというもの、頭の側面はバスが揺れる度に何度も窓にぶつかり、同じように窓のサッシと仲良くしている俺の右腕には、筋肉痛のような痛みがじんわりと広がっていた。しかし運転手は慣れたもので、山道だというのにスピードを落とすこともなく、猪突猛進なオンボロを上手く操ってみせる。もう何度目かのカーブの際に窓の下を眺めてみると、まるでドリフトでもするかのようにガードレールすれすれの所を走っていて、その光景に身体は意図せず硬直してしまう。

休日の昼過ぎだというのに乗客は他に居らず、また山道に入ってから今の今まで一つもアナウンスが流れていないことを考えると、目的地の停留所はこの路線における赤字なのかもしれない。運転手もおそらく乗客が乗っていない空のバスを毎日走らせて、また同じ

ように無乗客のバスを帰らせているのだろう。こんなにも長い距離を無駄に往復していれば、どれだけ運転が荒かろうが、業務を終わらせることを第一に考えるようになりそうだ。暫くの間そんなことを考えつつ、ゆらゆらと床で踊っている旅行鞆を両足で挟みながら、ペンキが剥がれて錆色を見せているガードレールの流線や、木々の間から何かが現れてきそうな鬱蒼とした緑をひたすら眺めていると、不意に視界が開けて、こじんまりとした田畑や点在する数件の家々の姿が目飛び込んできた。

『次は、ヤマノベ、ヤマノベ。お降りの際は、バスが止まってからお立ちください』

どれほどの時間山道を走っていたのかは分からないが、どうやらそろそろこのオンボロとはお別れらしい。久しく聞いていない気がするそのアナウンスに従って停車を待つと、最寄り駅から終始世話になっていた硬い座席から立ち上がり、胸ポケットに仕舞っていた乗車券を取り出して料金と共に箱に入れる。窮屈な座席から開放されて自由となった俺の身体は、ただ立ち上がってほんの数歩歩いただけなのに、筋肉が解れる得も言えぬ快感に喜んでいた。

そんな快感をもっと味わう為に一刻も早く背伸びをしたいところだが、一応の礼儀として振り返りざまにプロドリフターな初老の運転手に軽く会釈をし、全てが自ら発光しているかのようにも見える彩度の高い車外へと身を乗り出していく。すると日本特有の湿気を

多く含んだ蒸し暑い空気がすぐさま身体に纏わり付き、しっかりと冷房が効いていた車内との温度差も相まって、つい眉をしかめてしまった。

アスファルトの反射光に目を細めながらバス停の看板に目を移してみると、先程のアナウンス通りに『山ノ辺』と書かれており、朽ちかけて文字までかすれてしまっているその下の時刻表には、案の定と言うからしいと言うか、行きと帰りでそれぞれ二本ずつしか書かれてはいなかった。

そんな錆が垂れている時刻表のその隣には、木材とトタンで作られた簡易的な待合室が設けられており、そこには古びたベンチが一つ置かれているのみで、あとはペンキが剥がれてしまっている外壁のトタンになにかしらの看板が貼り付けられているのみだった。しかしその看板も自生している背の高い雑草に覆い隠されており、酷い錆と合わさって書かれている文字や電話番号は読めたものではない。

目を細めて周囲を見渡してみても、バスから降りて早速煙草に火をつけている運転手の他には、むわんとした青い香りを放っている草木の緑と、所々剥がれてしまっているコンクリートの道しか存在せず、どうやらここは、先程車内から眺めていたあの集落からは少し離れた所らしかった。風すらも吹いていないものだから、遠くから聞こえてくる鳥のさえずりのみが鼓膜を刺激し、とても閑散とした人気のない場所に思えた。

「サングラスでも持つてくれば良かったか」

普段は独り言など言わない性分ではあるが、大きく背伸びをしてあたりに充満している草木の香りを胸一杯に吸い込みながら空を仰いでみると、燦々とした強烈な太陽と澄み切った青がそこには広がっていて、遙々やって来た見知らぬ土地への不安と好奇心で胸が高鳴り、つい声に出して口を動かしたくなってしまった。

そろそろ行くか。

日陰になっている待合室のベンチに座って白い手袋を着けたまま一服している運転手を片目に、何年もの間旅のお供にしている使い古した革の鞆を握りしめ、行く宛もなく歩み始める。この土地には知り合いも居なければ、どこに行けば良いのかも分からない。ただいつまでもあたりを見渡していても仕方がないし、なによりも俺のことを尻目に缶コーヒーマデ飲み始めたおっさんと共に居るのは気不味いというものだろう。とにかくこの場を離れ、それから考えることにしよう。ひとまず民家を訪ねるのは後にして、取り敢えずはもう少し先——つまりバスで通ってきた道よりも更に奥へと進むことにした。

俺がこの山ノ辺集落を訪れたのは、ひとえに研究のためだ。所謂民俗学のフィールドワークというやつである。ただ研究とは言っても大学に所属していない在野の人間なので、殆ど全く趣味みたいなものではない。が、それは大学に所属している人間や世間から見た場

合であつて、大学教授のみが学者ではないと俺は思っている。在野でしか研究出来ないものも数多くあるし。と、まあ自分に言い聞かせているだけではあるのだが、それでも好奇心の赴くままに各地を巡り、様々な文化習俗を目にするのは楽しいことに変わりない。なのでもはやプロアマなどどうでも良くなつてきていた。

ところで話を戻すと、俺はとある古い文献を頼りに、この山ノ辺集落へとやって来た。古いと言っても明治の頃のものでそこまで古いわけでもないのだが、明治政府が行つた廃仏毀釈や神社合祀令——という名の淫祠邪教の排除——もつと言つてしまえば文化破壊の時期に記された、奇遇にも俺と同じく在野で研究していた全くの無名学者が自費出版した本を、神保町の古本屋で手に入れたことが始まりだった。

その本によると、

『ある処に、山ノ辺と云へる集落あり。その処、古より山神を祀り、また山中には古代の文字あり。集落の稲葉翁といふ住人から聴くところによると、卑弥呼の時代前より伝わりしものであると云ふ。百年に一度何処からか僧侶が訪れ、彫り直すとも伝わつてゐる。まことに奇妙な風習を持つ集落である』

とのことである。

先ず山神を祀つていふと言うが、そんなものはどこの地域でも祀つてゐるものなのでど

うでも良いとして、問題は古代文字の方だ。正確には神代文字と言って、日本にはヲシテ文字や阿比留草文字などが刻まれた岩が全国各地に残されており、もっとも身近で有名なのは神社で使われているものだろう。この集落に訪れた目的は、ずばり、その古くから伝わるというその文字だ。いったいなんの文字なのか、なにが書いてあるのか。非常に楽しみで仕方ない。

神代文字の一覧を一通りメモしてある手帳を広げながら歩いていると、地面はいつの間にかアスファルトから土へと代わり、道幅も狭くなっていた。もはや小道と言っても差し支えないその道の両脇には様々種類の雑草が生い茂り、どこからか水の流れる微かな音まで聞こえてきていた。どうやらこの近くに川があるらしい。

昔から人が住む里の近くには必ず水があるものだ。稲作をするにも必要だし、そうじゃなくても単純に生きていく上で水辺の近くでなければならぬ。ここは山の中。きつと湧き水が流れ込んだ綺麗で澄んだ川が流れていることだろう。顔でも洗って涼んでいくのも悪くないかもしれない。

歩を進めるごとに明瞭になってきたその水の音に吸い寄せられるようにして、足は道なりに進んで行く。

それにしても暑いな……。バスで結構登ってきたから少しは涼しいかと思ったんだが、標

高が高い所は日光が痛いなやっぱ……。人間は暑さを感じしてから汗を出すまでに五分程度かかるみたいだし、少なくともそれ以上は歩いているのか。

頸から垂れた汗が手帳に落ちて、メモが書き連ねてある紙に水滴の跡が広がってしまい、慌ててシャツに押し付ける。取り敢えず目当てのものが目の前にある訳でもないのでポケットに仕舞うことにして、今はとにかく歩くことに専念することにした。いや正確には、歩くことに集中しなければならぬ状況になり始めていた。

ため息をつきながら改めて今歩を進めている道を確認してみると、獣道という程ではないにしても、大の大人が歩くには少々厳しいものになっていた。視線を落として自分が歩いている地面を見てみても、なんとか土色は見えるものの、殆どが雑草に覆われた半獣道といった状態で、ズボンの裾は既に汚れ始めている。おそらく地元の住人もこの付近にはあまり近寄らないのだろう。こういった道の先には必ずなにかがあるものだ。曲がりなりにも道はあり、消滅していない。つまりは少なくとも誰かしらがここを通っているということだ。集落に伝わるなにかしらの祠があるのか、あるいは村八分にされた日陰者の家があるのかは分からないが、とにかくこの先にはなにかがある。腰丈の長さはある無数の雑草に囲まれながら、慎重に歩いて行く。

そうやって雑草をかき分けるようにして歩いて行くと、聞こえていた水の音もとうとう間近に迫って来ていた。

この辺りだと思っただけどなあ。

辺りを見渡してみても一面草木ばかりで良くは分からないが、どうやら今歩いている道はちょっとした土手のようなものになっているらしく、水の流れる音は左下の方から聞こえて来るらしかった。それが分かったのなら雑草の中に突入して川に降りれば良いと言いかもしれないが、事はそう簡単なものではない。怪我をするのが怖いし、なによりも、服が汚れる。

そもその話、この道の先に何かがあるのかが知りたいのであって、その前に少し水辺で涼んでいきたいだけだ。なのでそんな無茶をする程ではないし、最悪降りる場所が無くとも我慢すれば良い。まあその場所を今、発見してしまったのだが。

鉄分の多い赤茶けた川はやめてくれよ……。

手帳を見ていたら気付かなかっただろう、狭くて自己主張皆無な完全に獣道な小道に足を踏み入れて雑草をかき分け、丁度良い具合に緩やかな勾配となっていた小さな坂を下ると、不意に視界が広がって岩や小石がごろごろと転がる綺麗な小川に出ることが出来た。そこはまるで外界から切り離されたかのように、より一層静かで穏やかな空気に満ちて

いた。これは気のせいかもしれないが、流れる水があることによって先程までの鬱蒼とした緑の匂いが遠のき、キラキラと太陽光を反射しているその小川に近付くにつれて、暑さもなんとなくだが和らいでいくような気がした。

歩く度に足元で鳴る石の擦れ合う音や、聞いているだけで心が穏やかになる川の音を楽しみながら、無理をすれば渡れそうな浅い小川の側まで行くと、川辺にしゃがみ込んで割と激しく流れているその水を見してみる。すると龍の血で赤く染まったと云われたりもする赤茶けたものではなく、期待していた濁りの少ない——いや濁りなど全く無い澄んだ水質をしており、軽く手を入れると夏とは思えない程に冷涼なものだった。その小川の対岸はこちら側とは打って変わって鬱蒼と緑が生い茂っており、岸辺の葉は水に触れてゆらゆらと揺蕩っている。そんな光景もまた、涼しげで良いものだった。

飲んでも問題は無さそうだが、一応やめておくか。

そのヒンヤリとした冷たさについて飲んでみたくなってしまうが、当たったら堪らないので喉を潤したい衝動をなんとか抑え、顔を洗う程度にしておくことにした。その冷たい水を両手でそっと掬って顔に当ててみると、冷氣を含んだ水がサラリと汗を洗い流し、まさに爽快と言ったものだった。

少し休んでいくか。別に急ぐ旅でもないし。

歸りのバスまではまだ時間があるし、今日は下見のつもりで来たので別段急ぐ必要もない。座るのに良さそうな岩を探して腰掛けると、鞆を開いて着替えやノートでゴった返している中からタオルを探す。正直直射日光に熱せられていた岩に座るのは熱いが、今は少し脚を休めたかった。まあ顔を拭い終える頃には立ち上がっていたのだが。

タオルを仕舞う際に取り出したお茶をひとくち飲んで一息付く。バスに乗る前に買っておいたペットボトルのお茶はとくにその冷たさを失っていて、すぐ目の前に美味しそうな水があるというのに、ヌルくて味のあるものを飲むのはどこか葛藤に似たものがあつた。しかしそんなもどかしさも次の瞬間には消し飛び、その渋い味も意識の外へと追いやられていた。

なんだあれ？ 石積み……？

この場所に来たばかりの時は石だらけの不安定な足場を歩くことと、目の前の小川そのものに意識を取られていて全く気が付かなかったが、こうして喉を潤して冷静に周囲を見渡してみると、所々に平たい石で作られた塔のようなものが点在していた。所謂石積みと呼ばれるそれは、賽の河原で親よりも先に死んだ親不孝者への罰として子供たちが行った、現世では単に子供たちの遊びとして行われるものだが、こんな人気の無い獣道の奥にあるような小川で目にするとは思っていなかったので、その場違いにも見える無数の石積

みの存在に少々驚いてしまったのだ。

だが、驚きはそればかりではなかった。

「こんにちわっ！」

暫くの間疑問符を頭上に浮かべて呆然と川辺の様子を眺めていると、不意に背後から幼さを感じる無邪気な声が聞こえてきたのだった。突然聞こえてきたその人の声に俺の身体は条件反射的に跳ね上がり、それとほぼ同時に振り返る。

するとそこには、ひとりの少女の姿があった。年齢的にはまだ咲き始めの硬い蕾が開いた頃だろうか。川上から突然吹いてきた涼しい風に、胸の辺りまで伸ばした黒い髪をさらさらとなびかせて、大きな黒い瞳でこちらを真っ直ぐに見上げている。少女が身に纏っているノースリーブの白いワンピースは水に濡れているらしく、微かに肌の色が透けて見えていた。

今日の前に佇む少女はもしかや、男なら誰もがひと目で虜になってしまふ絶世の美女と伝えられ、一度虜になってしまったら死ぬまで精気を吸われてしまうという妖怪、川姫なのでは……。こんな場所に子供がひとりで居るといのは考え難いし。確か目を合わせずにじっと俯いたまま去るのを待つのが良いんだよね……。

色が白い割には健康的な血潮を讀んでいるその肌や、綺羅びやかに太陽光を反射してい

る輝かしい黒髪、可愛らしく小首をかしげている目鼻立ちの良い幼顔——まるで一輪の小さな白い花のような、そのあまりにも美しい立ち姿に、昔読んだ本に記載されていた川姫の事が脳裏に浮かんできました。

見ているだけで胸が高鳴るその美しさに、その可愛さに、その可憐さに、現実生きる肉の人間ではない気がして、非現実的な川姫なのではないかと思ってしまったのだ。眩しい真夏の光に満ちた周囲の光景も相まって、まるで白昼夢でも見ているかのようだ。

「……？」

お互い無言のまま改めて少女の濡れた姿を見ると、こちらの視線に気が付いたのか、眼前の少女は不思議そうな表情を浮かべていた顔に優しい笑みを浮かべ、にこっと微笑んでみせた。

一度川姫なのではないかと思ってしまうと、ふと恐怖が込み上げてきて身動きをするこゝとが出来なくなってしまった。喉が強張ってしまい、声も出すことが出来ない。いや、もしかしたらこれはただの恐怖ではなく、神に対する一種の畏怖なのかもしれない。実際に神を目前にしたとしたら、おそらく誰もがその強大な神々しさにその身を強張らせて、身動きなど到底出来やしないだろう。とにかくそうやって微笑みかけてくれた少女と向き合っているだけで心臓は鼓動を速めていき、気が付くとそれは、恋患いとも換言出来る状態に

なっていた。

しかしだとしても本当に川姫であった場合には、俺の生命は今日ここで終わりになってしまふ。川姫でなかったとしたら申し訳ないが、今は少し様子を見させてもらうことにした。もっとずっと永遠にその姿を眺めていたいところだが、云い伝えに従ってゆっくりと目線を下げ、ジッと呼吸を潜める。

「こんにちは……？」

すると可愛らしい顔が視界から消えてしまった目の前の少女は、先程とは違う抑え気味の声で再び挨拶の言葉を発し、細い腕を後ろに組んで軽く身体を傾かせてみせた。きつとこの子は優しいのだろうか、その声色は、どこか不安や心配を感じるものになっていた。人として今すぐにでも顔を上げて挨拶を返し、こんな所でなにをしているのかと訊ねるべきではあるが、しかしこれは妖怪川姫の作戦かもしれない。情に訴えかけて顔を上げさせ、その後すぐさま魅了して取って食うのだ。こんなにも美しい少女にならそれでも良いかもしれないが。

少女に蠱惑されて精気を吸い取られてしまいたいという強烈な欲求をなんとか抑え込みながら、暫く身体を固まらせて必死に無視していると、

「あ、わかったっ♪」

どうやら何かの遊びだとも思ったらしく、少女は不意に明るい声を上げて身体を弾ませると、忍び寄るような感じでゆっくりとこちらに歩み寄ってきて、

「えいっ♪」

腕を伸ばして脇腹を突いてきたのだった。手加減を感じるめちやくちや弱い力で、試すように。

そうやって無邪気なことをされると、小学生の頃の苦い初恋を思い出してしまい、また更に心拍数が上がってしまう。が、しかしこれも妖怪の作戦なのかもしれない。可愛らしい少女に化けて無邪気を装っているだけなのかもしれないのだ……！ 正直少女に触れてもらえて喜びですらあるが、動じずに硬直を継続する。

するとそんな俺の姿を見て流石の少女も疑問に思ったのか、ピンク色のサンダル姿でごろごろとした石の上に立っている為だろう、ふらりとしたおぼつかない足取りで更にこちらへ近寄ってくると、今度は大きく身体を傾かせてこちらの顔を下から覗き込んできたのだった。

肉付きの薄い脚を軽く広げて転けないようにバランスを取りながら、髪の毛を横に垂らしてジューッと見詰めてくる少女。小さな身体を精一杯傾かせて、鼻筋や頬に垂れた髪の間からこちらを覗き込んでくる眼下の少女とひと目視線を交わしただけで、あれこれと考

えていた思考は呆気なく停止し、それ以降目を逸らすことが出来なくなってしまった。

「おにいさん……？　なにしてるの……？」

先程よりも小さな声で話しかけてくる少女。まるでこそそ話をするかのように間近で発せられたその声は、見た目通りの柔らかな幼さを感じる、やや中性的で聞き心地の良い声色をしていた。身長差があるとは言っても、半歩前に出ただけで身体と身体が触れ合うほどの至近距離からそんな風に奏でられた少女の幼艶な声は、その澄んだ無垢な瞳に魅入っている呆然とした脳内に響き渡り、ついには背筋を伝って全身にまで木霊していった。

「ねえねえ……。おらの負けでいいから……」

一瞬聞き馴染みのない言葉が聞こえた気もするが、疑問を持つよりも先に少女は細い腕をこちらに伸ばして、クイクイと弱い力で服を引っ張ってきた。やはり少女はなにかの遊びだと思っているらしいが、その声や表情からは当初の明るさは失われていて、終いにはどこか悲しげなものに変わっていた。

確信も無いまま無視し続けるのは流石に可哀想だよな……。

真っ直ぐに見上げてくれていた瞳を落としてしょんぼりと俯き始めたその弱々しい姿に、我をも忘れて少女の美しさに夢中になっていった脳はふと冷静さを取り戻し、可哀想という表の理由と、このまま無視し続けていたら少女が去ってしまうという危機感に突き動かさ

れるようにして、

「ごめんごめん、俺の負け。お地藏さんごっこっていう遊びでさ。ほらあれだよ、ダルマさんが転んだみたいなの」

俺はこんな苦し紛れの言葉を発していたのだった。そんな遊びがあるのかは知らないが、その場にしゃがみ込んで少女と顔の高さを合わせると、未だに落ち着いていない胸の高鳴りを感じながら軽く笑みを作り、

「歳はいくつかかな？ キミの勝ちだから、歳の数だけ取っていいよ」

ポケットからペンギンのイラストが描かれた氷砂糖の袋を取り出して、俯いている少女の前に差し出してみる。すると少女は拗ねた様子ではあるが、素直にそれを受け取って小さな手を袋に突っ込み、なんと半分以上もの氷砂糖をごっそりと持っていった。みせた。

ワオ、俺よりも歳上ですか……。

「ゆるしてあげる……」

ピンクや黄色が混ざったカラフルな氷砂糖を小さな手のひらにこんもりと乗せながら、一粒ずつ摘んで食べ始めた少女は、初対面だというのに早くも友人と仲直りをするかのような口調で呟くと、

「遊んでくれたら、ゆるしてあげる」

氷砂糖の力で無条件に許してもらえるものだと思っていたのだが、やはり氷砂糖は甘さ控えめなだけはある。少女は更に条件を追加すると、綺麗に切り揃えられている前髪のおからこちらをじっと見上げて、口だけをもぐもぐと動かしながら無言の圧をかけてきた。

「あ、うん。まだ時間もあるしいいよ。あとこれ、良かったら飲んでいいからね」

まさかこんな山奥の、しかも全く人気の無いこんな場所で女の子と出会い、しかも何をするのかは分からないが遊びに付き合うことになるとは。

少女は片手に氷砂糖の山を乗せているので代わりにお茶のキャップを回してあげると、飲みかけで申し訳ないが近くの岩の上に置いてやる。すると少女はそれに気付くやいなや、そのペットボトルを手にとって躊躇無くゴクゴクと飲んでみせたのだった。見る限り少女は手ぶらのようだし、きっと喉が乾いていたのだろう。こんなにも暑いのかから仕方がない。鉄板でも用意すれば目玉焼きくらいは焼けそうだ。

「そういえば、キミはこんな所でなにしてたの？　ひとり？」

やはりと言ってはなんだが、どうやらこの少女は妖怪でもなければ川姫でもなく、ただの普通の少女らしい。今も気を抜くと無言で見惚れてしまいそうになってしまいが、その原因は妖力的ななかではなく、純粹にこの少女が美しいからに他ならなそうだった。「んっ」と飲み終わったお茶をこちらに返して再び氷砂糖をガリガリと食べ始めた目の前の少女は、

「いしづみしてたの。お友だちは用事があつて遊べないんだって」

と、簡潔かつ全てを納得させてくれる説明をして、額に浮かぶ小粒な汗を手の甲で拭つてみせた。その汗の量を見るに、どうやら所々べったりと身体にくっついて肌色を浮かばせているワンピースは、川の水ではなく少女の汗に濡れているらしかった。

「おにいさんはなにしてたの？」

少女が身に纏っているその薄手のワンピースから覗くスラリとした脚や、ノースリーブで肩まで露わになっている細い腕につい目が奪われてしまうが、あまり見ていると変に思われるかもしれないので、そういった箇所には吸い寄せられてなかなか言うことを聞こうとしない眼球をなんとかコントロールし、「旅行かな？」と、もぐもぐと動いている少女の口元に視線を固定しながら答える。その形の良い品を感じさせる小さな唇は、血色の良い新鮮な果実のような色をしていて、ほのかに濡れているのが視認できた。

「いーなーっ。おらも旅行したい」

ただその場に立って氷砂糖を食べることに飽きてきたのか、早く遊びたそうな様子で身体をゆらゆらと揺らしながら足元の石を足先でいじり始めた少女は、それだけを口にして、なにかを考えるかのような横顔で綺麗な小川を眺めたのだった。

オラって……。まあここは田舎だしなあ、ある意味貴重かも。

元々『俺』という言葉は男女関係無く使われていたようだし、『おら』はそれが訛ったようなものだから別に不思議ではないが、女の子らしい容姿とのギャップに得も言えぬものを感じてしまう。お年寄りが使うのならギャップなど微塵も感じないのだが、まだ幼いこの子が言うとは矛盾に似たものを感じてしまった。ここはほぼ閉鎖された山間の田舎、そんな環境で育てば自ずと周囲の影響を受けてそうもなるのだろう。田舎臭い気もするが、趣を感じて悪くはないと思った。

「それで、なにして遊ぶ？」

暇そうな様子で小川を眺めている少女に声をかける。真夏の強烈な光に照らされた輝かしいその姿は、まるで川辺に現れた妖精のようだ。——などと頭の中では様々なことが浮かんでは消えていくが、一方の身体はと言うと、お茶を受け取ってから今の今まで手持ち無沙汰でなにもしていない。

「うーん……、水遊びしよっ！」

すると暫く頭を傾げて考える素振りをみせた少女は、思い付いたかのように元気な声を弾ませると、

「つめたくて気持ちいいよ！」

比較的流れが穏やかな小川の浅瀬に足を浸して、パシャパシャと水飛沫を上げてみせた

のだった。

「危ないから奥の方には行かないでおうね」

手にしたペットボトルに口をつけて、少女が飲み残したお茶を口に含む。それは、ほのかに甘い味がした。

続きは本編へ！